

朝鮮・中国から一家6人 よくも無事に引き揚げてこられた —私の戦争体験記— 山門 リヨ子（市民の会世話人）

ソ連参戦 羅津から逃げ出す

小学校4年生、9歳のとき、私は朝鮮半島の北端、羅津（らしん）と言う港町で、満鉄に務める父、母、7歳、5歳、2歳の3人の妹とともに暮らしていた。昭和20年（1945年）8月8日夜、突然、宣戦布告したソ連が国境から50キロ弱の羅津を空爆してきた。爆弾のはじける音に、窓ガラスはピリピリと響き、家は揺れ、恐ろしさに身体は動けなくなった。窓のすき間から焼夷弾がキラキラ光りながら落ちてくるのが見えた。

最前線の要塞地帯だから関東軍の精鋭部隊が守ってくれていると信じていたのに、情報収集のため司令部に行った市長が帰ってきて「要塞司令部はもぬけの殻。昨夜中にどこかへ撤退したらしい」。これから大変な逃避行が始まる。

山の中を歩いて

翌9日、ソ連の波状攻撃が少し止んだ午前10時ごろ、「山の中へ一時避難する。隣組単位で水源地に集合するように」という緊急の指示が出た。山の中にある水源地まで16キロ。父は満鉄の水道課に勤務し、その水源地にいた。5時間くらいかかって水源地に着き、父に会うことができた。ほっとしたのもつかの間、「羅津に敵が上陸したらしい。このまま豆満江沿いに会寧へ出て満州に入る」という指示が出た。

昼間は敵に見つかるからと夜も歩き続ける。なぜかこのころ毎日雨が降り続き、もう声も出す元気もなく、ぬかるんだ道を眠りながら父や母の服をつかんで歩いた。お乳もミルクもなくなり背中で餓死した赤ちゃんを「必ず迎えに来るからね」と土を掘って埋めていた隣家の奥さんの悲痛な泣き声はいまも耳の奥に残っている。

川を渡る 妹がはぐれる

3日目、大きな川に出た。大人の腰ほどもある水が滔々と流れている。橋はどこにも見当たらない。老人や子どもは大人の人に背負ってもらって渡った。このときすぐ下の妹が行方不明になってしまった。父はその川を何度となく行き来して妹を探したが、その間に人々はどんどん先へ進んでいく。あまり離れると取り残されるので諦めて出発した。

5日目、ようやく山を下り、平地に出たところで満鉄が手配してくれたトラックに老人と女子ど



もだけが載せてもらって会寧（かいねい）まで行けることになった。このとき、はぐれていた妹に偶然会えた。橋のない川で妹だけが先にどなたかに背負われて渡ったのだった。

ソ連機が凶門駅を爆撃 阿鼻叫喚の地獄絵図

会寧でようやく列車に乗ったときは「もう歩かなくていい」という救われた気持ちでいっぱい。列車が朝鮮と満州の国境の街、凶門（ともん）に着いたのは15日だったと思う。狭い列車からホームに降りて身体を伸ばしたり、ホームの水飲み場に走ったり・・・そのときだ。7機のソ連機が飛来し、ホームめがけて爆弾2発を落とす。ホームの人、無蓋貨車の人が一瞬に吹き飛ばされた。運悪くホームには弾薬を積んだ日本軍の車両が停車していてそれに引火、ドカーン、ドカーンと爆発し、被害は一層大きくなった。

ホームの線路わきには頭、手、足、形のわからなくなった死体が重なり合う。負傷者のうめき声、助けを求める声、親が子を探す声、子が親を呼ぶ声、硝煙の臭い、人の焼け焦げる臭い、血の臭い。この爆撃をのがれた人は駅前広場の防空壕へ走ったが、そこへもソ連機は機銃掃射した。私たち家族は列車の下にもぐって助かったが、すぐ下の妹がまた行方不明になった。このときの死者は400人以上、負傷者は500～600人といわれる。

撫順に 各地から避難民 妹見つかる

再び列車はノロノロと動き、吉林（きつりん）駅に着いたときホームの柱に「日本無条件降伏」と書いたビラがたくさん貼られ、敗戦を知った。8月17日だったと記憶している。19日に撫順（ぶじゅん）に着いた。

撫順は満鉄が経営する石炭の露天掘りで有名な炭鉱の街。そこへ各地から避難民が流れ込んだ。日本人の学校、料亭、寺院などが収容所となった。撫順に落ちついて2か月ほどたったとき、凶門の爆撃のあと行方不明になっていた妹が見つかった。けがもせず、病気にもならず無事に。奇跡のよう。羅津の住宅に住んでいた方のお世話になっていた。食べ物のないとき2か月も他人の世話ができるなんて。本当に神様のような人たちだと両親は感謝するばかり。おかげで家族6人がまたそろった。

ひどいソ連兵の暴行

8月27日、ソ連の軍隊が進駐。同時に日本人警官などが姿を消し、街は無政府状態に。「口助」と恐れられていたソ連兵たちの暴行はひどいものだった。家に侵入して腕時計は万年筆などを奪う。もっとも恐れられていたのは女性への暴行。免れるため、頭は丸坊主にし、男性の服を着て、顔もわざと汚くした。外出はできるだけ避け、天井裏などに隠れる場所をつくっていた。

翌年3月ころソ連軍は姿を消し、代わりに八路軍（中共軍）、4月になると八路軍が撤退し、政府軍がはいってきた。どちらもソ連軍のようなことはしなかった。

「子どもを売ってくれ」

中国人による子ども買いに悩まされた。男の子が600円、女の子が650円。当時貴重品の腕時計が100～300円。「子どものない人が欲しがっている。日本人は優秀だから」「労働力として」などの理由から。避難民側としては「そばにいる子が日々弱っていく。いま中国人に預ければ命は助かる。そうすればいつかは会える」と追い詰められた気持ちを持つ人がいた。母親が病気で亡くなり、残された3人の子どもが中国人に引き取られたこともあった。

舞鶴に上陸 母の里、鈴鹿に

政府軍が入ってきたころから内地引き揚げの話が聞かれ始めた。6月1日、羅津からの避難民第

一陣が小学校の運動場に集合。約2キロの道を歩いて撫順駅に。用意された列車は一枚板の木材運搬用無蓋貨車。周りに杭を立て縄を回し、それにリュックなど縛りつけて人が落ちないようにし、内側に座る。内地へ帰れるとワクワクしていた。撫順を出てから何日も大平原を走る。その大きな風景、地平線の果てに沈む夕日、星空に感動した。

コロ島から乗船。舞鶴をめざして出港した。日本を目前にして船内で亡くなられた方もいた。そのつど菰に巻いて水葬に。汽笛を鳴らしながらその場を一周するのだが、その汽笛はとても悲しく響いていた。

舞鶴にようやく上陸。まず父の実家のある大阪へ行くが、大阪は焼け野原。母方の祖母が家を用意して待っていてくれた鈴鹿に落ち着いた。



山門さんはこの体験を、10月14日、旭が丘小学校6年生児童約120人に話した。市民の会会員で元高校教師、近藤 由美 さん(61)と対談する形で地図や写真などをスクリーンに映して語った。

「助けて」「おかあさん」…泣き声、叫び声 今も鮮明

2021.10.16

中日

鈴鹿の山門さん

小学生に引き揚げ体験語る

太平洋戦争後に朝鮮半島北部から命からがら日本へ引き揚げた体験について、鈴鹿市東旭が丘六、元ピアノ講師の山門リヨ子さん(66)が十四日、近くの旭が丘小学校の六年生に話した。(酒井直樹)

「戦争で幸福になる人はいない」

体験談の披露は地元の元高校教師、近藤由美さん(61)と対談する形で実施。スクリーンに地図や記録写真を映しながら、児童百二十人余に語り掛けた。当時、山門さんは九歳。

戦後76年

父親が南満州鉄道(満鉄)に勤務していたことから、旧満州(中国東北部)に近い現在の北朝鮮の港町・羅津で父母と妹三人の家族六人で暮らしていた。一九四五(昭和二十年)八月初め、ソ連の参戦で現在の北朝鮮から旧満州の図門まで歩いたり、貨車に乗ったりして逃げ、駅でソ連機の爆撃を受けた。山門さ



九死に一生を得た引き揚げ体験を語る山門さん(左)と近藤由美さん(右)。場所は鈴鹿市東旭が丘5の旭が丘小で。



山門さんの体験談を聞く6年生たち

は「火薬を積んだ貨車が爆発し、人の頭、手、足がバラバラに散らばり、ホームは血だらけになった」と振り返った。記憶は今も鮮明で「助けて」という声や、子どもの「おかあさん」という泣き声が聞こえた」という。死者は四百人以上に上ったとされるが、山門さん家族は列車の下に潜り込み、九死に一生を得た。八月下旬に「日本無条件降伏」とのビラを見て終戦を知ったことなどにも触れた。児童からは「どんなことを考えながら歩いたの」と質問があり、山門さんは「とにかく歩くだけで、考えることはなかった」と答え「戦争で誰も幸福になる人はいない」と訴えた。山門さん一家は船で京都府の舞鶴港に着き、親類を頼って鈴鹿に住んだ。六年生たちは授業で戦争中、地元には海軍の航空隊や基地があったことなどを学び、戦争の体験談を聞くことと「鈴鹿市の戦争遺跡を保存・平和利用する市民の会」メンバーの山門さんらを紹介した。

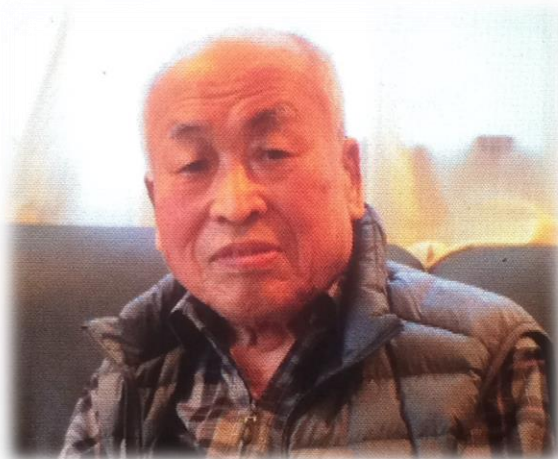
学徒動員で海軍第二航空廠へ 飛行機の整備 特攻機を見送る

津市の 落合 郁夫 さん

津市に住む落合郁夫さん(90)は、旧制中学3年の14歳のとき、学徒動員で鈴鹿海軍航空隊に隣接する「海軍第二航空廠」で働いていました。関係者がどんどん亡くなられていくなか、そのときの貴重な体験をうかがいました。

学徒動員で

落合さんは三重県安濃郡河内村(現津市芸濃町河内)に生まれ、河内小学校から高田中学に進んだ。3年生の1945年(昭和20年)5月1日、海軍第二航空廠に入った。家から通える者以外は寮生活。鈴鹿海軍航空隊への補給と戦闘機の修理が主な業務で、直接海軍に帰属する軍属だった。



配属されたのは、格納庫の中にある「組立」職場。格納庫は本来、飛行機を納めるところだが、敗色濃くなると、飛行機は爆撃を避けて滑走路周辺の掩体壕に駐機していた。それで格納庫はすべて修理や整備の工場となっていた。

ゼロ戦を修理

私たちの職場にはあこがれの戦闘機「ゼロ戦」がよく送られてきた。翼の修理は、尾翼の水平舵、垂直舵の方向舵を正すこと、主翼の補助翼フラップを完全にすることであった。いずれも操縦席からワイヤーで操作するので、ワイヤーの接続などが大事な作業となる。もう一つは脚の修理。離陸して翼の中に正確に翼が納まるか、着陸の際、正しく脚を出して着陸に耐えられるか。そのために取付部分を分解し、棒状のベアリングを取り替えるなどして完成させる作業である。ときどき、パイロットが愛機の修理の進み具合を確かめに来ていた。

直心棒で海軍魂

工場には主計将校が配属され、その席のうしろには「直心棒」という木刀がかかっていた。足を開いて両手を前に出し、上体を倒して臀部をこの木刀で打ちのめすのが海軍の有名な体罰である。寮には主計少尉(のちに中尉に昇進)が舎監として君臨していた。1週間ほどたったとき、就寝前に「非常呼集」がかかった。灯火管制の暗い廊下に二列横隊に整列したところ、舎監は軍手をはめた。「眼鏡をはずせ」「両脚を開いて歯をくいしばれ」の命令のあと鉄拳が飛んだ。右手で左頬を、つづいて左手で右頬を殴る。往復びんだである。近づいてきたとき舎監の「ハア、ハア」という荒い息遣いが伝わってきた。またの日は向かい合った者同士で交互に相手を殴るという対抗ビンタもあった。

睡眠不足・空腹・疲労

勤務は原則8時間だったか9時間だったか、よく覚えていない。2時間の残業が常態化していた。休日は隔週の日曜日。軍歌の「月々火水木金々」を地でゆくものだった。数学と英語の教科書を持っていったが、一度も開くことはなかった。睡眠不足、空腹、過労の3点セットだった。

隔週に一度の休暇は待ち遠しかった。土曜日は残業がなく、定時で終わると近鉄白子駅か鼓ヶ浦駅に駆ける。江戸橋で下車しバスを待つ。終点の椋本に着くころは夏でも夜の帳がおりている。家まで5キロ余を歩く。山道は足がすくむほど怖かった。家に着いても食べ物が潤沢にある時代ではない。よもぎをたくさん入れた麦飯がうれしかった。祖父、父母、弟妹6人の家族のぬくもりといっしょに二週間ぶりに食欲を満たして息を吹き返した。

特攻機を見送る

7月に入ったころか、ゼロ戦の特攻機が飛び立った。「帽振れ」の号令がかかり、いっせいに見送ったので、それが誰と言うともなく特攻機であることはわかっていた。風防を開け、白い絹のマフラーをなびかせて離陸していく姿は本当に美しい。低く旋回して飛び去っていったけれど、それが死出の旅立ちであるだけに、よけいにもの悲しく美しかった。

グラマンの機銃掃射

作業中に警戒警報に続いて空襲警報となり、道具はそのままにして飛行場のはずれの野池の中の小島に避難した。栈橋を渡った島が避難先で、草の上に横になると仕事の疲れや睡眠不足からすぐ眠ってしまった。

少しまどろんだところで島の真ん中に据えられてある機関砲が火を吹いた。砲座で射撃を続ける勇士に眠気も吹っ飛んだけれど、つづいて飛来した米軍艦載機グラマンにびっくり仰天した。黒い機体で脚を降ろせば着陸できそうな超低空。操縦桿を握ったパイロットを真ん前に見た。100メートル離れていない目の前を、バリバリバリッと機銃掃射を浴びせて飛ぶグラマン。もう少し手前だったら小島にいたわれわれの命は消えていただろう。

8月15日

その日は真夏の太陽がジリジリ照りつけていた。8月15日の正午、学生も工員も広場に集合し、重大放送を聞いた。何も聴きとれなかった。私たちはソ連への参戦かと話し合っていたが、それが敗戦だった。

工場に配属されていた海軍将校が「直心棒」を背にうつろな目で呆然としていたのを見て敗戦が事実であることを知った。その日は定時で工場を出たが、酒をあふった軍人が抜身の軍刀をふりかざしているのを見た。寮に帰ったら、近くの神社で軍人が割腹自殺をしたとか、飛行機で敵艦に突っ込む計画があると伝わってきたが、何がどうなることか考えも及ばない。戦争の中に生まれ、勝つことしか伝えられず、死ぬことが名誉だと教えられた子どもにまともな判断ができるわけがない。

夜になり灯火管制のため電灯に被せてあった黒い布を取り払ったときの何とまぶしかったこと。14歳の私が「平和」というものを実感した瞬間だった。

学校に戻ったのは9月半ばだった。

落合郁夫(おちあい・いくお)さんの略歴

1931(昭和6)年、三重県安濃郡河内村(現津市芸濃町河内)に生まれる。河内小学校から高田中学に進み、3年生で終戦を迎える。学徒動員を4カ月経験。三重大学卒業後、小学校教員を経て津市議会議員(2期)、三重県議会議員(3期)をつとめる。

インタビューとともに、いただいた冊子「学徒動員の記録 紅の血は燃えてたか」をもとにまとめました。
(文責：竹内 宏行)

戦争体験といのちの大切さ、生きるということ おばあちゃんから若い人たちへ

加藤 二三子(市民の会世話人)

鈴鹿市立神戸中学校に夢工房の講師として招かれ、8月20日(金)、夏休みの登校日に「戦争体験といのちの大切さ、生きるということ」をテーマに、全校生徒のみなさんにリモートによる講演を聞いていただきました。

私は日本が中国や朝鮮半島・アジア諸国に兵隊を送り、軍隊が大きな力を持っていた時代の、昭和10年2月3日に紀北町で生まれ、現在86歳のおばあちゃんです。

昭和12年、2歳の時に日華事変が起こり、16年、国民学校に入学、この年に日本は太平洋戦争に突入しました。17年12月1日、鈴鹿市が軍都として誕生しました。

20年1月9日、二郷村(現紀北町)の山林に焼夷弾が投下され山林が焼け、その後日々激しくなる空襲に逃げまどい、その中で妹を亡くしました。食糧や生活物資が配給制となり、空腹を抱えてひもじい生活のなか、連日連夜の空襲警報で勉強どころではありませんでした。

昭和20年、空襲が全国に広がり、三重県でも津市、四日市市、桑名市、伊勢市などがB29爆撃機の焼夷弾により街全体が壊滅状態となり、多くの死傷者と罹災者がでました。鈴鹿でも玉垣、柳、算所、稲生に爆弾が投下され、死者、負傷者、家屋全半壊の被害を受けました。

8月6日、広島に原爆が投下され死者14万人、8月9日、長崎に原爆が投下され死者7万人。8月15日、玉音放送があり、多くの命を奪って戦争は終わりました。太平洋戦争で亡くなった人は310万人、戦災孤児は12万人とされています。私の子ども時代は、戦争に翻弄された日々でした。

昭和22年3月、敗戦の混乱の中、国民学校最後の卒業生となり、4月、新制中学校に入学しました。社会の授業で「あたらしい憲法のはなし」の本をもらい戦争放棄と平和を学びました。当時の中学生の大半は高校進学をあきらめて就職し、空襲で廃墟となった日本の国の復興に努めました。

私たちは国のために命を落とした多くの人々の思いを無駄にしないで、平和への思いを大切に、次の世代にバトンを渡さなければいけません。昭和60年7月1日、鈴鹿市は戦後40年を記念して「非核平和都市宣言」をしました。「いのちは地球より重い」「いのちは失ったら二度と戻らない」。戦争の時代を体験した私たちは歴史を教訓にして、未来永劫、戦争のない平和で幸せな社会であることを心から願います。



浅尾さんが「**鈴鹿市の軍施設の全容**」を発刊 再調査で新発見，新事実 鈴鹿海軍航空隊の入隊人員は約1万人

元教員で戦争遺跡研究者の浅尾 悟 さん(66)が「鈴鹿市の戦争遺跡～鈴鹿市の軍施設の全容～」(A4判 110ページ)を出した。2年前に出した「鈴鹿市にも戦争があった～軍都・鈴鹿の全容～」の続刊。その後、再度の聞き取り、現地再調査、文献調査など重ね、前著を訂正・追加する形でその成果を収録した。新事実、新発見がたくさん盛り込まれた大変な労作だ。

浅尾さんが列挙する主な変更内容は以下の通り。

- ①鈴鹿海軍航空隊の歴代司令が解明できた。また、入隊練習生のほぼ全容がわかり、入隊人員が約1万人であることがわかった。
- ②陸軍第一気象連隊と陸軍第一航空軍の戦争末期における行動と、北伊勢陸軍飛行場や鈴鹿陸軍飛行場との関係についてより詳細に判明した。
- ③北伊勢陸軍飛行場と鈴鹿陸軍飛行場の戦争末期の様相が克明に解明され、末期におけるこの地方の両飛行場の役割が解明できた。とくに鈴鹿陸軍飛行場は未完成飛行場ではなく、秘匿飛行場として日本全体の中できちんと位置付けられ、特攻部隊が展開されるなど機能を完全に果たしていたことが解明できた。
- ④鈴鹿市の空襲地点を見直し、以前の聞き取り調査の再分析と再度聞き取りを敢行し、投下地点を訂正し、より正確なものにした。
- ⑤新しい図版として「鈴鹿海軍工廠建物位置図」「三菱重工業鈴鹿工場建物位置図」「北伊勢陸軍飛行場油脂庫実測図」を新たに加えた。
- ⑥挿入写真も約半数を差し替えたり、新しく追加したりした。
- ⑦関連年表の誤記を訂正し、かなり追加した。

浅尾さんは巻頭文の末尾で次のように訴える。

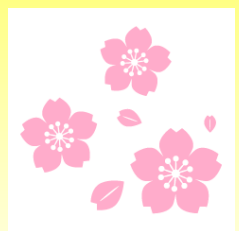
「研究する中で、たくさんの方々から当時の資料をいただいたり、鈴鹿市の戦争遺跡に関する書籍や遺物入手した。しかし残念ながら、これらの資料を保存・展示・公開する公共施設がこの鈴鹿市にはない。鈴鹿市がなぜ軍都に至ったのかを現物資料を使って市民が学べる施設の早急なる開設を切望する。戦時中に誕生した鈴鹿市はその責任を負うべきである」

この本の入手希望者は浅尾さんにメール

asao@js9.so-net.ne.jpで申し込んでください。送料込みで1200円。



来年は 鈴鹿市誕生80年 桜の森公園春まつりは3月26日に 秋には記念の催しを計画



鈴鹿市が誕生したのは1942(昭和17)年12月1日です。陸海軍の軍需工場や飛行場、教育・訓練機関などを円滑に機能させるため、白子町、神戸町の2つの町と12の村を大合併して生まれました。来年、2022年はそれからちょうど80年になります。この節目の年を十分に意識した催しを「市民の会」として展開していきたいと考えています。

まず、鈴鹿海軍航空隊跡の「桜の森公園春まつり～広がれ平和の輪～」です。3月26日(土)＝雨天のときは27日に順延＝に実施する予定です。2年前の第3回はコロナ禍で中止しましたが、今度で5年目の第5回になります。「市制80年」と銘打ち、昨年同様、格納庫のあった場所を巡る「タイムトラベルウォーク」、ライブ、屋台村のほか、第4回は取り止めた、子どもたちの「空を舞う」遊びを復活したいと考えています。

第1回実行委員会を12月8日、旭が丘公民館で開きました。これまでのメンバーに加え、旭が丘公民館の館長さん、隣接する鈴鹿医療科学大学の吹奏楽部、ダンス部の部長さんらが参加してくれました。「市民の会」の会員の方々には実行委員や当日スタッフとしてぜひ協力願えたらと思います。

秋以降に、保管している格納庫部材の展示、戦争遺跡写真パネルの展示、講演会かシンポジウムができないか、検討していきます。会員のみなさまからアイデアをいただければ幸いです。なお、今年の市制記念日の展示会・講演会はうまく準備できず、実施できませんでした。申し訳ありませんでした。



▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

発行 鈴鹿市の戦争遺跡を保存・平和利用する市民の会
代表 竹内 宏行・中森 成行
〒510-0254 鈴鹿市寺家 1-2-47
電話 059-388-6508
Mail ta818hi@mecha.ne.jp

△▼△▼△▼▼△▼△▼△▼△▼△▼△